



Title	アイヌの人たちが営み続けてきた集落の今日的景観
Author(s)	吉原, 秀喜
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観：北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 32-35
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92870
Type	report part
File Information	ronshu_biratori (18).pdf



[Instructions for use](#)

アイヌの人たちが営み続けてきた集落の今日的景観

吉原秀喜
平取町アイヌ施策推進課 課付学芸員



写真 細くのびる二風谷地区中程にある萱野茂二風谷アイヌ資料館の前景と所在地表示銘石（撮影：吉原）

上の写真2葉は、萱野茂二風谷アイヌ資料館の前景と正面入口近くに設置された銘石で、資料館所在地を表示しています。時に、資料館や萱野茂氏の自宅には、このアイヌ語を表書きした郵便物が届いたこともあったようです。北海道日高地方、平取地域における文化的景観の重要な特徴の一つは、アイヌ民族の系譜につながる人びとが、縄文期あるいはそれ以前の時代から暮らし、これからも営みを持続していこうという今日的な村里や街区がそこにあるという点です。町内の二風谷地区がその最もわかりやすい事例だと言えます。

そこでは、例えば人びとの生活・生業の史的変遷については主に沙流川歴史館が、また「伝統文化」と称されることが多い近世・近代のアイヌ民族誌については主に平取町立二風谷アイヌ文化博物館が、それぞれ館内の資料展示や野外のチセ（復元家屋）群を通じて概要を知らせてくれます。現代の暮らしぶりについては、博物館、歴史館や復元家屋群のある「二風谷コタン」から、工芸伝承館「ウレシパ」を中継して萱野茂二風谷アイヌ資料館とを結ぶ「匠の道」を軸にしつつ、時に脇道にもそれて散歩すれば、そのあたりは現代のアイヌ民族系住民を中心に、和民族系その他の文化的背景を有する人びとが働いたり、学んだり、暮らしたりの場であり、その街区内の景観です。ただし、好奇や蔑視の眼差しで住居等をのぞき見するような態度での「観光」がありえないのは、もちろんです。

ここまでの文章から読者には、大まかに分類すると次のような二つのタイプの疑問が生じるかもしれません。一つは、現代になって「観光」のために形成されたところ以外に、アイヌの人たちが昔から集住していたムラがまだ北海道にあるのか、というタイプ。もう一つは、そうした村里や街区は北海道内の諸処に現にあるのであって二風谷だけが特別ではないはず、というタイプ。

回答は、意外と両タイプの疑問に対して共通しています。筆者なら大旨「そうなんです。けっこうあるんですよ。二風谷の特徴は、多くの住民の方々も行政の側もそのことをしっかり表明していることです」と伝えます。文化的景観の考え方に留意しながらつけ加えると、「いま見えているまさにこの風景が、アイヌの人たちが営み続けてきた現代の集落景観であ

り、すでに二風谷地区の一部エリアは重要文化的景観に選定されてもいます」となります。そこにはミュージアム群もあり、「アイヌ伝統文化の今日的継承」というミッション（目標理念）を掲げ、地域に根ざした運営が図られています。と深掘りする場合も。

いますぐにそれをめざすという話ではありませんが、世界遺産登録の評価の表現として、「顕著な普遍的価値」(OUV=Outstanding Universal Value)という概念があります。筆者は、自分たちのスキルアップを図るため、平取地域の OUV を強いて提示するとすれば、次のように言えるのではないかと仮にまとめ、機会があれば問いかけているところです。

「アイヌ民族の場合は、基盤となるコミュニティとその文化が、歴史的経緯の中で不本意な変化を強いられ、大きなダメージを受け続けたケースだ。そのダメージは、地震や気象異変などの自然災害を大きく上回るものだとも言え、「復興」が長期的課題となる。こうした場合、現段階では希有とも言える取組が行われている地域やコミュニティの価値を次のように積極的に評価し、持続的に支援すべきなのではないだろうか。

消滅の危機にあった先住民族文化の復興を着実に進め、現代的な再構築を図り、持続的に基盤を拡充させている地域的・民族的コミュニティがここにある。」*

とは言え、日本社会全体や北海道内の類似した地方自治体の現状を見渡すならば、あつという間にいわゆる「限界集落」になってしまう可能性さえある厳しい現実、社会状況が続いています。引き続き、気を引き締めていかねばなりませんね。



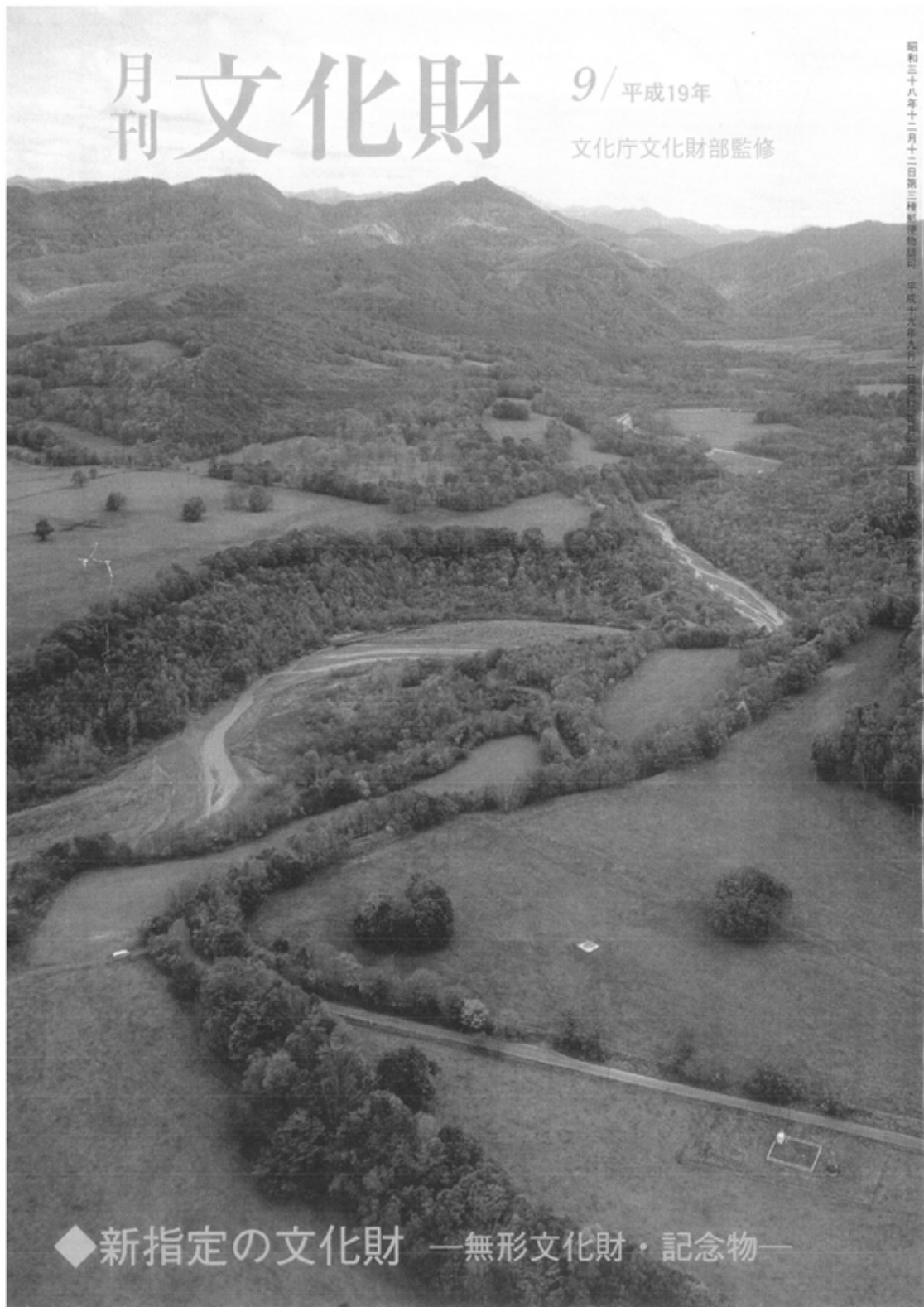
図 2 1 世紀前半期の平取町二風谷地区の立地環境概観 (Google Earth より)

補注

* 吉原が国立民族学博物館や東京文化財研究所における研究会等の機会に発表してきた見解

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観 ―牧野・牧野林の広がり―」
吉原秀喜 2007『月刊文化財』平成 19 年 9 月号 表紙解説の再掲（次ページとも）

※第 4 次選定申出に向けた作業が進展している中で、ふりかえり・再確認の参考資料とする意図で、
第 1 次選定直後の解説記事の一部をそのまま掲載していただいた。ただし、カラー写真はモノクロにした。



〔表紙解説〕

アイヌの伝統と近代開拓による
沙流川流域の文化的景観

― 牧野・牧野林の広がり ―

砂が流れる川である。北海道日高地方唯一の長流、沙流川の名は、音の面ではアイヌ語サラ(砂)をもとに付けられた。湿原を意味する。シシリムカ(Sisirimuka)という古名も伝わる。解釈すると、要は辺りが詰まることである。この場合、「辺り」が指すのは川が海に流れ込む付近で、土木の用語では「河口閉塞」だ。「詰まる」のは、たくさん砂が流れるからである。流域の地質的特性から洪水時の土砂量がさまざま。つまるどころ、アイヌ語の発音、漢字の読み、和語(日本語)の意味、そして川の実相が混成した含蓄ある表記が「沙流」だ。この成り立ちの文脈は景観にも通じる。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が重要文化的景観として選定された。「アイヌ文化の諸要素を現在に至るまでとどめながら、開拓期以降の農林業に伴う土地利用がその上に展開することによって多文化の重層としての様相を示す極めて貴重な文化的景観」(文化庁発表資料)という評価に基づく。文化のフィルターを通すと、景観も混成していると言える。

北海道内で初めての選定であり、全国的にも三番目となる。選定範囲は、国有林・町有林を主体とする森林域と国・道が管理する河川域で、総面積は約四三八一ヘクタールと広大だ。①落葉広葉樹林・針広混交林を主とした自然植生が基盤であ

る。②先住民民族であるアイヌの伝統が基層にあり、今につながっている。③これらに近代以降における開拓の営為が重層し、混成した多文化性・多民族性を包含している。自然、歴史、文化の観点から概括したこうした諸特性は、日高地方の景観としての典型性、全国的あるいは世界的な視野で見た場合の顕著な固有性を示すものだ。

表紙写真は、沙流川の支流、額平川の水系、宿別に広がる選定区域の俯瞰である。この一帯は、牧野・牧野林の特徴をよく示す地区である。数段の階層になった河岸段丘の平坦面は牧草地として拓かれ、現在では「びらとり和牛」の肥育に利用されている。主に段丘斜面の、自然林が帯状に残されて形成された牧野林とともに、大がかりな段状の光景を呈する。川筋には遺跡や折りの対象となってきた場所が多く並ぶ。写真の中心には、野生スズランとしては日本一の群生地が広がる。野生とはいえ、もともと生育適地だったことに加え、放牧された牛馬が有毒成分を含むスズランを食べ残すので、繁茂が促進された結果である。

詳しい理解のためには当地への来訪をお願いするが、掲載写真に即して一言だけ付け加えると、アイヌの人たちもまた牧野・牧野林の形成、管理に深く関与してきたし、生産された和牛を食しもあるのはもちろんだ。「近代開拓」は、アイヌ民族の生活・生業様態を大きく変容させ、異質な景観を創出した。しかし、景観の上書きは、斉一で隙間のないものではなかった。幸いにして。

(平取町立「風谷アイヌ文化博物館学芸員・吉原秀喜
写真提供・株式会社建設維持管理センター)

■お詫びと訂正

『月刊文化財』八月号において、写真提供のクレジットが不足しており、誠に申し訳ありません。訂正いたします。左記のとおり訂正いたします。

二ページ(口絵解説)
写真提供・福岡市埋蔵文化財センター
四六ページ
写真提供・鳥根豊教育庁

◎次号は歴史資料部門三〇年の特集です。

◎『月刊文化財』の購読については左記にて承ります。

*電話/01200・2003・696
*FAX/01200・2003・974

※購読のお申し込みでいただいたご住所やお名前などは、企画の参考など本誌にかかわる目的のみ利用し、他の目的では使用いたしません。

月刊文化財 九月号(五二八号)

平成十九年九月一日発行

定価七三〇円 本体六九九円
(送料八四円)

監修 文化庁文化財部

発行所 第一法規株式会社

編集 東京都港区南青山二丁目一・一七
〇三三三四〇四一・三二五二(大代表)

本誌掲載記事の著作権を保持します。